みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マスターブロの死
(変わるネパールと変わらぬネパール：グローバル化した世界に暮らす, 第4回)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 南, 真木人
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5112

元気な頃のマスターブロ（左から２人目）。吉祥の印として米を額につける。（1992 年）

変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

第４回

国立民族学博物館助教授
写真・文 南 真木人

みなみ・まきと　1961 年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『エスノ・サイエンス』（京大出版会　2002 年）、『文化の生産』（ドメス出版　1999 年）、『アジア読本ネパール』（河出書房新社　1997 年）など。

身内の死ほど辛いことはない。私が調査するマガール人の村で、第二の父親のように尊敬してきたマスターブロ（先生爺さん、以下ブロ）が亡くなった。彼の死は、私にそれまでの開発援助観を変えさせるほど衝撃的だった。

一九九八年、久しぶりに訪ねた村には、病にふしたブロがいた。老人によくある前立腺肥大で、手術費が工面できず二か月が経つ。早速、首都カトマンズの大学病院に連れて行き、治療することにする。付き添いは四男のテクだ。

幸い手術は成功した。だが、その三日後ブロは急死する。それは次のような経緯による。テクは医者から手術後「今晩から食事をあげてよい」と言われたが、それを病棟の看護師に伝えず、食事の再開が一日遅れた。術後二日目、ブロに排便がなく、医者から浣腸の指示がでる。テクは浣腸を院外の薬局から買ってきたが、それを机に置き看護師に何も言わなかったため、一日放置された。遅れて行なわれた浣腸後、ブロはベッド脇で排便中に気張っていて呼吸困難に陥り、そのまま帰らぬ人となった。

テクを責めるわけではないが、私の無念は「便秘で死ぬとは何事か」であった。だが、この馬鹿らしいほどの悲劇がネパールの現代を象徴している。じつは、治療が後手にまわったのは、テクと看護師の間にコミュニケーションが成り立っていなかったからだ。首都に住み近代的な知識を身につけた看護師は、テクを要領の得ない「村人」と見下し、逆にテクは看護師の言うことがよくわからず、看護師が自分を馬鹿にしていると不信感を抱いていた。同じネパール語でも、看護師が使う洗練された話法と、「村人」の冗長な話法はかみ合わず、会話にならないのだ。

日本でも、医療関係者と患者の関係は対等とはいいがたく、医者の説明がわからないこともあろう。だが、ネパールのそれはレベルが違う。「村人」と都市住民との間には、不均衡な教育や開発、都市的経験の格差により文化的な断絶があるのである。

だとすると、「村」の開発に環境問題など近代の負の側面を勘案している余裕はない。「村」に近代化を物量作戦で投入し、この構造を変えない限り悲劇は続くのだ。ブロの死を契機に私は、現金を渡すことを躊躇したり、箱モノ援助に批判的な〝良心的〟NGOの発想は、ナイーブ過ぎるのではないかと考えるようになった。

マスターブロの死